第16回看護実践学会学術集会

パネルディスカッション

ウィズコロナ時代の看護過程の継承を考える

座長　岩城　直子（元金城大学看護学部　教授）
田井　雅代（JCHO金沢病院　看護部長）
平松　知子（金沢医科大学看護学部　教授）

看護過程を学ぶ基礎教育においては臨地実習においてその実際を学ぶことが重要である。また、新人看護師が専門職としての独自の判断を示し、看護診断に基づき看護問題に介入し明確な成果をあげる上で、看護過程に基づいた看護の実践がなされる必要がある。しかしながら、COVID-19感染症拡大の影響で当初は、医療・教育の現場は、未知の感染症に対する混とんとした状況があった。このような様々な制限や制約があるなかで予防策を講じながら基礎教育、現任教育の担当者は看護過程をいかに教育していくかを検討、熟慮し、臨地実習や新人研修を実施してきた。

基礎教育からは、坂本泰子氏（金沢医療センター附属金沢看護学校）が在宅看護論実習での実際について、地域活動の縮小、利用者の様子を伝える視覚的教材、ZOOMの活用などの工夫や、無意識に“受動的”になっていた学ぶ姿勢が“能動的”“自ら学ぶ姿勢”に成長する学生の姿から、教員・指導者ともに多様な学習方法や双方向的に学ぶことの大切さに気づかされたことが報告された。道券夕紀子氏（金城大学看護学部）は、成人看護学実習での実際について、臨地実習における感染予防対策、実習施設の受け入れが中止となった時の実習プログラム変更の実例やプログラムに対する臨地実習指導者の評価、学生の学びの状況と課題、高機能シミュレーションシステム（SCENARIO）の活用例が報告された。

COVID-19禍に臨地実習を経験してきた新人看護師の教育の実際については、神野亜紀子氏（金沢医科大学病院）が、新人看護師教育体制を再構築し、OFF-JTでは感染対策を講じた研修開催やアクティブラーニングの実施、OJT（On-The-Job Training）では新人看護師の心理的安全性を確保したペア制での教育支援や病棟管理者を中心とした看護職全員で新人を育てる環境の醸成、メンタルサポートとして、教育担当者による新人看護師会の開催やキャリア支援センター所属看護師による定期面談、メールでの個人相談受付等、支援内容の工夫が報告された。水谷弘美氏（JCHO金沢病院）は、メンタルヘルスケア支援の強化や新人研修内容の見直し、特に入職から３ヶ月は自身の経験を言語化して共有することやリフレクションによって事象を前向きにとらえることが出来るような支援、技術の獲得は、OJTを丁寧に行うことが効果的だったことを報告した。

続いて、各パネリストが看護過程の継承におけるCOVID-19禍の影響について意見を述べた。この時期の新人看護師は、Ｚ世代であったことに加え、COVID-19禍で対人関係能力を養う機会が減少していたため、コミュニケーションスキルや社会性が未熟であるという特徴があった。アセスメントをする上では情報収集が重要である。しかし、臨地実習においてはマスク着用での対応となり、面談時間も制限されるなど患者の微妙な表情の変化を見ることができなかったり、家族との対面での交流も出来なかった。病院では黙食・個食、私語の制限等の予防対策が取られていたため、インフォーマルな場面での情報共有がなく、情報収集量が少なかったなど、感染予防対策による弊害が述べられた。一方、COVID-19禍のメリットとして、ICTの活用が促進し、同様の事態が起こった時に対応が可能になったことや様々な教育方法を模索したことによって、今後の基礎教育や現任教育への応用ができることが挙げられた。会場から、基礎教育で今後どのようなことを盛り込めばよいかについて質問があり、臨床の立場から神野氏、水谷氏が、社会性や倫理観の獲得ができていることが望ましい旨が返答された。

今後のウィズコロナ時代おいて、新人看護師が看護過程に基づいた看護実践が可能になるよう基礎教育機関と施設とが連携、協働していくことが必要である。また、看護過程の継承が看護の質の

保証につながっていくよう、時代に合わせた教育、コミュニケーション力獲得に向けた方略を模索していくことが課題であると思われた。